
魔法少女リリカルなのは Zwei Geschichten

カレーパン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは Zweie Geschichten

【Zコード】

Z0468Z

【作者名】

カレーパン

【あらすじ】

新暦65年、春。

第97管理外世界・現地名称地球に、古代遺産・ジユエルシードが流れ落ちる。

そこから始まるのは、少女一人の出逢いの物語。そして、少年二人の見守る先へ……。

魔法少女リリカルなのは Zwei Geschichten。 始まります。

プロローグ Etc

夢。夢を見ている。

あの娘と初めて話した口。

夕焼けに赤く染まつた世界で、俺は、毎日公園で涙を流している
女の子に声を掛けた。

『……そんなことしてて、楽しいか?』

泣いている女の子に聞く「ことじやない。

しかし、その時の俺は、なにを言つていいものか分からなかつた
んだろう。今よりも更に口下手で、酷く人見知りしていた俺には、
あれが精一杯だった。

それでも、あの娘は放つて置けなかつた。
だから、声を掛けた。

後先なんて考えず、ただ放つて置きたくなかった。その小さな背
中を、支えてあげたかつたんだ……。

「…………ん」

朝の定時。

田覚まし時計が鳴る数分前に田が覚め、スイッチを切る。それと同時に、枕元に置いてある携帯がなった。

サブディスプレイには、『なのは』の文字。携帯を今年買つてもらつてからは、毎日、毎朝かけてくる。俺を起こしてくれようとしているんだろうけど、いつも俺の方が先に起きているから、余り意味を持つていらない。

それでも、俺はこの電話は嫌いじゃない。
その考えに少し笑い、電話に出た。

「はい」

『あ、おはよひびきこいます。和貴さん』

「ああ、おはよ」

耳には、いつも通りの猫を彷彿とさせる、快活な少女の声が届く。

「今日は、ひやんと起きてるみたいだな」

『うう……！ 昨日のことは忘れてください……』

少しからかいないが、俺は昨日のことを探して出す。

いつも通り電話がかかってきたのはいいのだが……私は今、とても眠いです。といった感じの声だったのだ。

そんな無理しなくとも、俺はいつもこの時間に起きてるんだがな。

「ん、分かった。忘れるよ」

『はい。お願ひします……』

声が萎んでるので、なのはも昨日のことを思いだして落ち込んでいるんだろう。トレードマークのツインテールが、力なく垂れ下

がっている姿が目に浮かぶ。

流石に朝からテンション激減はダメだろ。と思い、直ぐに慰める。

「なのは、安心しろ。面白かったから
『にやつ！？ 全然安心できませんよー』

「頑張れ」

『はい！ …… って、和貴さんが原因じゃないですか！』

いつも通りの朝だ。

電話を終える。これも、もう口課になってるな……。

制服に着替え剣十字のネックレスをかけ、洗面所で顔を洗う。

「…………」

顔を上げれば、自分の顔を見れる。

日本人ではあり得ない、純正の白髪。蒼と黒の虹彩異色の眼。明らかに、常人ではあり得ないものだ。

だから、俺は誤魔化し続ける。

伊達眼鏡をかけ、少し長めの前髪を眼にかける。これで、大体気付かないもので……かれこれ一年 一人を除いて クラスメイトにはバレていない。

「しつ…………！」

頬を叩き、気合を入れる。

さあ、今日も頑張ろう。

池田 和貴
いけだ かづき

私立風芽丘学園に通う、高校2年生。

勉強が少し苦手で、スポーツは平均以上には出来るくらい。人見知り、口下手、無口、根暗。中学からの友人には、そう指摘された。

他に紹介するとなると、髪の毛は地毛だと言つことくらいだ。

他人に教えることではないが、両親とは血が繋がつていないと
うのも、だな……。

「おはよう、かづくん」
「…………おはよう」
「ん、二人ともおはよ」

池田夫妻。

捨てられていたらしい、まだ赤ん坊の俺を拾ってくれた。心優しい人達だ。

歳的には、普通に今の俺くらいの子供が居てもいいんだけど、どうも子宝には恵まれなかつたとか。ついでに、先が義母さんで後が義父さんだ。

朝食を三人で食べ、義父さんと一緒に家を出る。

「一人とも、行ってらっしゃい」

「行ってきます」

「……行って来る」

俺は学生。両親は共働きなのだが、仕事について詳しくは知らない。ただ公務員だと云う事と、よく帰つてこないということしか知らない。まあ、今頃知りつとも思わないがな。

「……気を付けてな」

「そっちも。行ってきます」

「……ああ」

途中まで一緒に歩き、分かれて学校へ。

学校の授業をしつかり受け、昼休みには屋上で昼飯を食い、寝ながら空を見上げる。

「……

」じつして空を見詰めていると、何故か落ち着く。

青いキャンバスに筆を振つて白い絵の具を撒き散らしたような、そんな空好きだ。まあ、夜の星空も好きだけど……。

「お、やつぱりここにいたか

「ん？ なんだ、お前か」

「なんだはねえだろ……」

屋上の校舎から顔を出したのは、俺のオッドアイを知っている中

学からの友人である高城だ。

いつもの笑顔を張り付かせ、寝転がっている俺の近くまで来る。

「なあ、今日放課後暇か？」

「なんで」

「合図。お前もどうだよ

「いい。興味ない」

何を言うかと思えば、俺が絶対に行かないようなことを聞いた。
理由は大したことない。

ただ、今日は両親一人とも帰つてこないと聞いてるから、家のことを俺がしないといけないからだ。

「相変わらず付き合いわりいのな

「ほつとけ……」

そう言つて、俺は高城に背を向けるようじりじりと横を向く。
言われなくても、付き合い悪いのは自覚している。でも、家のことは俺がしつかりしないとだし、なにより大勢で何かするつていうのは苦手だ。

「じゃあ、俺の用事はこんだけだから。あばよ～、池田つつか～ん

「俺は、とつあん役をやればいいのか？」

「……そこはそのままノツてくれよ」

「お、わりい……」

ノリの悪さも、分かつてゐる……。

「たく……。じゅな

「おう

高城は戻るよつのので、軽く手を挙げて送り出す。
校舎に続く扉が閉じたのを確認し、軽く溜め息を吐く。

「……やっぱ疲れる」

高城と話すのが、ではなく。話すこと自体が疲れる。
こととん、俺は人付き合いがダメなよつだ。
まだ昼休みの時間は残つてゐるので、伊達眼鏡を外して目を閉じ
る。春の暖かな風が、俺の頬を撫でていった。

寝過ぎした俺は、見事に午後の授業はサボることになってしまった。
た。

やつちまつた……。

「…………ま、いっか

伊達眼鏡をかけて教室に戻り、鞄を持って帰ることにした。
やつちまつたことは、考へても仕様がない。やつせと帰らつ。

「そればどうなんですか？」

「仕方なかつたんだ。昼寝は、どうも普通に寝るのとは違つた誘惑がだな」

「それでも……ダメですよ」

下校の途中。知り合ことあつた。

高町なのは。

今朝の電話の主で、私立小学校に通つ小学3年生だ。
この子と会つたのは、いつだうつか……。確か、俺がまだ小学生の時だつたかな。

小学生のくせに、変に落ち着きがあるし聞き分けはこゝで……
まあ、付き合ひ方としては有り難いんだけど。もつと子供らしくしてもいいと思うんだけだな。

「どうかしたんですか？」
「いや、どうもしない」

俺が顔を見ていたのに気付いたよつて、小首を傾げてこちらを見つくる。別に言つ事でもないのだが、適当に誤魔化しておく。

「和貴さんのは……」

「ん」

「和貴さんは、将来何になりたいって言つのせ、決まつますか？」

不意に聞かれたその質問。また何か悩んでるのか？

なのはの悩みは、小学生が考へるには早すぎる事だと思つ。たぶん、授業とか友達の影響なんぢやないかと、思つ。
答えてやりたい。でも、俺にはこの子が望む答えは持ち合わせて

いない。

「決まつてない、お先真つ暗だ」

「そう、ですか……」

「これは、直ぐに解決なんてできないことだ。ゆづくじと解いていけばいいことだ。まあ、俺も手伝える」とは手伝おう。

「お、たいやき食おう。たいやき」

「え？」

「ほらほら、行くぞ」

「あわわー」

いつまでも同じこと考えていても仕方ないので、無理矢理話を変えて、有無を言わさず手をとつて引っ張っていく。
こんな事でもしなければ話を変えられない自分に気持ちが落ち込む……。

「498……499……500……つー」

帰宅後、干してある洗濯物を取り込み、夕飯を食べた後、毎日の田課である竹刀の素振りをしていた。

毎日500回。

どうしても出来ない時 風邪ひいたりしなければ、約10年毎

日欠かさず行つてゐる。

ふう……と、熱くなつた息を吐き、窓辺に座る。

俺が素振りをやるよつになつたのは、剣道を始めたからだ。まあ、今では部活はせずに素振りをしてるだけになつてゐるけどな。

「……今日は綺麗だな」

窓辺で空を見上げれば、夜空には星が瞬いでいる。

ここでもそれなりに綺麗なのだから、違う所に行けば、もっと綺麗な夜空も見れるんだろう。……それを見てみたが、やはり面倒なのでこの夜空が一番か……。

この夜、俺が知らないところでは、魔法の種が蒔かれた。
ジュエルシード。

俺がその存在を知るのは、もつと後になる。

プロローグEpiſs（後書き）

次回『プロローグ Zweig』

天は輝き、全てを照らす。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0468z/>

魔法少女リリカルなのは Zwei Geschichten

2011年12月1日22時52分発行